

の重要性を認識しつつ、同時にこの問題が国民の安全に大きく関係するとの観点から、第73回総会において、その安全な推進策について見解を表明した。

このたび、学術審議会科学と社会特別委員会から、科学研究費補助金等により行おうとするDNA分子組換え研究に適用されるべきものとして、組換えDNA実験指針案（以下「指針案」という。）が示された。その内容は、さきに本会議が表明した見解にほぼ添うものと判断されるが、なお検討を要する点が指摘される。

この「指針案」では、科学研究費補助金等文部省が研究計画に即して経費を支出する大学等における実験について適用されることに限定されているが、今後、通商産業・厚生・農林水産の各省や科学技術庁等所管の研究機関及び企業等においても、当然この種の実験技術を必要とすると思われるので、これとは別に実験取り扱い指針が設定されることにならう。この場合、先行した学術審議会の指針との整・合性が図られなければならない。

また、上記の「指針案」では、当面の規制だけを示し、それ以外は中央委員会（仮称）を設置して、ここに以下の任務（特に1、2及び5は重要である。）をおわせることになっているが、その後の運営に当たって問題が起こる可能性が考えられる。

1. 実験計画の指針適合性についての審査
2. 指針であらかじめ指摘された事項の認定の検討及び実験に関する助言についての検討
3. 組換えDNAの先導的研究に関する審議
4. 組換えDNA研究の長期的・総合的方策の審議
5. 指針の改訂に関する勧告
6. 実験に関する内外の情報の収集及び提供に関する検討
7. その他実験の安全確保上必要な事項に関する建議等

この種の中央委員会は、学術審議会ばかりでなく科学技術会議にも設置されることが予想され、この場合、二つの中央委員会による決定事項の間にそごを生じないよう十分注意する必要がある。

そのための効果的な方法として、これらの中央委員会間の常設的な連絡の場を設けることが必要である。またそのために、本会議においても、関係の学協会、研究者と協力して、研究者の自主的な組織の育成・強化を図るよう努める所存であるが、貴省におかれても、技術的に重要であると認められる事項に関しては、そのような研究者組織の意見を十分聴くことが適当であると考えられる。

11-5

総学庶第1380号 昭和53年10月17日

科学技術会議 議長 福田 赳 夫 殿

日本学術会議会長 伏 見 康 治

組換えDNA実験の進め方について（要望）

本会議は、標記について、IUBS研究連絡委員会（プラスミッド分科会）が取りまとめた意見を別添写のとおり文部大臣に提出いたしました。

つきましては、貴会議におかれても、組換えDNA実験の進め方を検討されるに当たっては、

文部省の学術審議会の組換えDNA実験指針やその後の運用との間にそこを生じないよう十分配慮ください。

(別添写は 11-4 参照)

11-6

総学庶第1486号 昭和53年11月18日

内閣総理大臣 福田 赳 夫 殿

日本学術会議会長 伏見 康 治
写送付先：科学技術庁長官, 環境庁長官,
大蔵大臣, 文部大臣, 運輸大臣,
気象庁長官, 郵政大臣, 建設大臣

中層大気国際協同観測計画(MAP)の実施について(勧告)

標記について、日本学術会議第76回総会の議決に基づき、下記のとおり勧告します。

記

国際学術連合会議(ICSU)が、国際的な太陽・地球系空間観測事業の一環として、国際協力によって推進することに決定した中層大気国際協同観測計画(Middle Atmosphere Program, 略称MAP)に我が国が参加し、その計画の諸結果を学術研究の推進、応用分野の開発等に有効に利用することは、その意義が極めて大きいと考えられる。したがって、その国際協力事業を成功させるために政府はMAP計画の我が国での実施について必要な予算措置等を講じられたい。

(別紙)

説 明

地球大気に関する研究は、国際地球観測年(IGY, 1957-1958)を境にして大きく進歩した。これは、このとき、史上初めて世界の関連研究者が協力し全地球規模の観測を行った成果によるものであった。人工衛星の出現も時を同じくしており、国際協力の意義を一層深めることになった。

以来、地球大気を研究する上で、IGYのような国際協力の重要性が認められ、太陽極小期国際観測年(IQSY, 1964-1965)、太陽活動期国際観測年(IASY, 1969-1971)が実施され多くの成果を挙げてきている。我が国もこの国際協力に参加し国際的に高い評価を受けてきた。

現在、国際協同観測と研究のために二つの事業が進行中である。一つは、国際磁気圏観測計画(IMS, 1976-1979)であり、他の一つは、地球大気開発計画(GARP, 1968-)である。IMSでは、地球大気が直接太陽風と接するはるか遠方(地球半径の数十倍)磁気圏境界から電離層(100キロメートル)までの大気の観測を行い、太陽風エネルギーの地球大気への流入を明かにしようとしている。他方、GARPでは、天気予報の改良と気候のメカニズムの解明を主目的として、対流圏と下部成層圏の観測を行うものであり、全地球規模の観測の外に、